# 4711

松河莉希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
４７１１

【Ｎコード】
Ｎ５０９８Ｅ

【作者名】
松河莉希

【あらすじ】
決着のついてない出会い程「思い出」なんて簡単な言葉で片付けられない・・今でも貴方を思い出す。夏になると思い焦がれ消えていく・・そんな一夜の出来事が忘れられない男の恋物語。よろしかったらご覧下さい。

## 真夏の夜の夢

一年で夏が一番好き

日々豪語しているキョウコには似合いのガーデンウェディングかもしれないが、
真夏特有のギラギラした太陽が照りつける下での挙式は半端じゃない。

幸せに満ち足りた華やかな輪の中から抜け出すと、俺は肌を露出させた女性陣
を横目に不謹慎と思いつつ、ネクタイを緩めワイシャツのボタンを外す。
たったそれだけのことでかなり解放された気分になる。
その心地よさに浸りながら遠巻きに花嫁を見つめる。

輪の中で幸せそうに笑顔を振りまくキョウコ。
こんな表情のキョウコは初めて見た。
これがきっと俺の知らない母親のオンナの部分なんだろうか。
そう思ったらフッと笑みがこぼれた。
この歳になってオンナとしての母親を知るとはね・・・
「何ニヤついてるのよ」
いつの間にか隣に立つ長身の麻子が、冷ややかにそう言い放つ。
はっきりとした顔立ちと。力のある瞳が印象的なまぁまぁの美人。
家を重んじる、厳格な父方の親族の中でかなり奔放に生きている彼女は俺たちと
ウマが合うのか、『離婚』という形で縁がなくなった今でも仲良くやっている
イトコ殿。

離婚といってももう十五年前の話。
十五年も経つと別れた父親の記憶なんて、ないに等しい。
おかげで戸籍上の新しい父親をすんなり受け入れることもできたし、俺自身が
『伊住啓介』から『神崎啓介』になることに何の抵抗もなかった。

「しかしさぁ。なんで今頃、結婚式挙げるのかね。入籍二年前だぜ？」
「いいじゃない。キレイなんだからさ」
確かに。
日頃の鍛え方の賜物なのか、五十を目前にしている割にはかなり均整のとれた
プロポーションではある。
それなりに自慢の母親だ。

そろそろパーティも架橋に入る。と同時に昼下がりの日差しもかなりキツイものに
なってきたらしく、参加者は日陰を求めて少しずつ散り散りになっていく。
「そういえばさぁ。ケースケ今日、彼女連れてくるとか言ってなかった？」
麻子の不意の問いかけに、俺は銜えタバコのままライターを弄び答える。
「・・・・・・別れた」
「は？・・・また？」
呆れ声の麻子をよそに俺はタバコに火をつけた。
麻子の“また”には訳がある。
自分で言うのもなんだが、オンナにはそう不自由していない。
ただ時期が限定されている。

今の時期、俺にオンナがいることはまずない。

オンナに言わせれば、梅雨の初め頃から俺はおかしくなるらしい。
時々上の空、違う世界にいってる、私を見ていない・・・で最後には「理解できない」
でジ・エンド。
深く吸い込んで、ゆっくりと吐き出したタバコの煙は先ほどから吹き始めた風に
流されて消えていく。
まるで言葉にならない声のように・・・
「あれ？」
風下に立っていた麻子が俺の首筋に鼻を近づける。
「・・・・・・・・・くすぐってぇよ。何」
「ケースケ、香り変えた？」
さすが高級クラブの従業員。そういう所には敏感だ。
「夏なんでね。柑橘系」
「ふーん」
疑り深い麻子の視線に、俺は知らん振りを決め込んだ。

夏の初め、恒例のやり取り。
麻子は俺のこの時期の変化に誰より敏感だ。
それはオトコには分からない「オンナの勘」てやつなのかもしれない。
多分、他のオンナも気付いている。別れを告げてきたオンナ達も。

今の時期、特定のオンナは俺の記憶の中。
たった一夜の出来事、まるで夢物語。
それでも唇が、指先が、十年を越えてもまだ覚えている。
夏の生ぬるい風と湿った空気中の水分が蒸発し熱気を帯びる夜。
いわゆる熱帯夜。

汗と体臭が混じる中でほんの少しだけ感じ取ることができた柑橘系の香り。
触れ合った肌、自分とは違う体温。腕にかかる重み。濡れたシーツ。
けだるい脱力感・・・・・・・・
全ての感覚がフルに動きだす頃、俺は同じ思いを繰り返す。

額に手を翳して空を見上げた。
雲ひとつない濃い青空が広がっている。

―　ハル・・・俺はまだ貴方を夢に見る　―

# 少年

机と書類に埋もれた人影のない夕暮れの部屋に、サインペンが紙を擦る音が響く。
左側に解答を置き、それを元に右側のテスト用紙に丸をつける。
左右の違いにのみ気を使う以外は何を考えていようが構わないこの時間が
俺は気に入っている。

小中学校対象の進学塾。
一人の教師が五人から十人を教えていく。この少人数制が功を奏したのか、
地域の塾の中でかなり高い評価を受けていた。
就職して六年。我ながらよく続いているほうだと思う。
継続ということの大切さを知ったのはいつの頃だったか・・・
俺は口元で笑いながら首を横に振った。
やめておこう、悪い癖だ。
―　貴方は過去に縛られている　―
いつかのオンナに言われた台詞。
「縛られてる？　忘れられない思い出ってないのかよ。オマエには」
「忘れられない？　そんな甘いものじゃないケースケのは！　私は貴方の何なの？
　その思い出よりも軽いの？」
溢れんばかりの涙を浮かべてそう聞かれ、俺は何も答えられなかった。
その時確かに俺は目の前に立つカノジョを愛していた。現実のカノジョを。
思い出に嫉妬されることに困惑した俺は、結局抱きしめることでしかその場を

ごまかせなかったけ。子供だな・・・

窓から吹き抜ける風にテスト用紙が揺れる。
俺は席を立つと窓に向かい、サッシに手を掛けたその時。
強めの風が机上のテスト用紙を舞い上げて、床中を埋め尽くした。
「あ・・・」
とりあえず窓を閉めると散らばったテスト用紙を拾い集め、席に戻る。
枚数と汚れを確認するうちに採点ミスを発見。
返却前に気付いてよかった・・・ほっと胸をなでおろす。
念のため氏名を確認しながら丸を付け直し、点数を訂正する。

加納瑞希、佐藤泉水、望月泉里
六年生にしてはしっかりした字体で書かれた氏名。
確か・・・こいつら母子家庭とか言ってたな。
どんな場所でも噂好きな奴はいるもので、そういうことは嫌でも耳に入ってくる。
俺が来た道をずっと早くから歩いている少年たち。母親はどういう人だろう。
そんな思いがふとよぎる。
キョウコはいつも強かった。強くて聡明で優しかった。
彼の母親もそうであって欲しい。

全ての採点を終えると、俺は軽く伸びをする。
茜色に染まっていたはずの空は既に宵闇に近付いている。
帰り支度をして、部屋の明かりを消した。
「？」
もう明かりのないはずの部屋が、ぼんやりと明るい。
誰かが消し忘れたパソコンのモニターが部屋を青く染めている。
「海・・みてぇだな」

不意についたその言葉に胸が高鳴る。
『海に行きたいなぁ・・・澄んだ青い海に』
白いシーツの中でそう呟いたハル。

それが俺の聞いた彼女の最後の言葉。

モニターの電源を落とす。
部屋は静かに漆黒の闇に包まれた。
ゆっくりとドアを閉めて、家路についた。

―　貴方は青い海に逢えたのだろうか　―

# Perfume of love

人の気配が感じられない駅裏の通りに、携帯の着信音が鳴り響く。
俺は慌ててジーンズのポケットから携帯を取り出す。
手の中で小刻みに震えている携帯の液晶画面には見慣れた三文字「ヒトミ」
最後に逢ったのって二ヶ月前だっけか？
「なに？」
唐突な出方にヒトミはかなり驚いた様子で言葉に詰まっている。
『あ・・・出てくれないかと思った』
「なんで？　一方的に振られて疎遠にされたの俺の方なんですけど」
『そうだけど・・・』
「で？　用件は？」
『用って程じゃ・・・ただ、どうしてるのかなって―」
かなり思い切りのいい感じで振っておいて、こうやって電話してくるオンナの
神経が良くわからない。
角を曲がりマンションのエントランスに向かうとオートロックシステムにキィを
差し込む。
その後にも続いていく他愛のない会話。ま、たまにならこういうのも悪くない。
エレベータに乗り込み居住フロアに着く頃ヒトミの口調が変わった。
『聞いてみたかったことがあって・・・』
ずっと気になっていたとヒトミは言う。だったらその場で言えばいいのに。
これも良くわからないオンナの心理ってやつ？
「へぇ。何？」
『携帯』

「あぁ？」
『部屋にある・・・携帯』
「・・・・・・」
『ごめん。見ちゃったんだ、淡いピンク色の。絶対ケースケのじゃないよね。
誰のなんだろうってホントはずっと気になってたの。だってケースケもらった物って
別れるとためらいなく処分しちゃうでしょ。なのに大事な書類がある場所に
入ってるから』
「・・・あったっけ？　てかお前の縫いぐるみも置いてあるけど？」
『マジ？　取りに行った方がいい？』
「いや、いいよ。結構抱き心地いいから」
『・・・・・なんか嬉しいなその台詞』
心なしかヒトミの声が明るくなった。まぁそんなものか。
『あ、そういえばこの前ねぇ―』
再び他愛のない話が続き、リビングのドアを開ける頃「じゃぁまた」
の言葉と共に
通話が途切れる。（本当に「また」なんてあるんだろうか）
俺は携帯をソファに投げ出すと、テレビのスイッチを入れる。
ぼんやりと明るくなる画面に天気図が浮かびだす。明日の天気予報
は曇りのち雨。
午前中の降水確率は７０パーセント。憂鬱な朝を迎えるのは正直、
ちょっと
勘弁してほしい。
冷えたビールのプルトップを空ける。プシュッという炭酸の抜ける
小気味いい音が
暗い部屋に響く。半分くらい一気に飲み干し、ゆったりとソファに
身体を投げ出すと
疲労気味の全身に緩やかに酔いが回りだす。

のろのろとソファを泳ぐ手に携帯が触れた。そのまま引き寄せると指先で当てもなくスクロールを弄ぶ。
キョウコ、麻子、職場、連れ・・・いくつかの羅列の中にヒトミの名前。
そしてヒトミの上の名前には鍵のマーク。ロックされた電話番号。
俺は身体を起こすと、サイドボードの引き出しを開ける。パスポートや保険証書
なんかの上に無造作に置かれた淡いピンクの携帯電話。持ち上げると筒状の飾りが
ついたストラップが揺れる。その筒状の中に気に入りの香水を入れることが
できると持ち主が教えてくれた。
もう匂うことはないけれど、記憶の中にある柑橘系の香り。
Ｐｏｒｔｕｇａｌ　４７１１

俺はヒトミにウソを吐いた。多分、ヒトミも気付いている。
番号を消去されただの箱と化したものなんて、ガラクタと同じ。
忘れたのなら簡単に捨てられる。

携帯を引き出しに戻すと、酔い醒ましにベランダに出る。
薄い雲の隙間から月明かりがうっすらと漏れている。

消せない番号。箱になった電話。Ｐｏｒｔｕｇａｌ。

俺に残された、記憶の中にいる彼女との接点。

湿気を帯びた空気が身体中に纏わりつく。そうだ・・・こんな夜だった。

―　同じような空気の中、俺はハルの寝息を隣で聞いた　―

## First LOVE

地下へと続く階段を下り、重厚なドアを開けると渋めのジャズが流れてくる。
通いなれたこの店でも、数ヶ月ぶりともなれば初めて来店するかのように
新鮮でワクワクする。
前と変わらず洒落た店内。一枚板のカウンター越しに勇次は片手を挙げて俺に合図する。
飯島勇次。高校時代からの悪友。「喧嘩をしたら分かり合えた」とかいうありがちな
オトモダチの構図。
「おう」
俺がスツールに腰掛けるかどうかのうちに、目の前に琥珀色に満たされたグラスが置かれる。
ターキーのダブル。飲まなくてもわかる。
「お前さぁ、たまにはオーダー聞いてもよくないか？」
「・・・何飲むんだ？」
頭の中でいくつかのカクテルが思い浮かぶ。が結局俺はいつも通り目の前の
グラスを揺らした。
勇次はそらみろと言いたげに唇の端でニヤリと笑う。
勇次の磨く仕草を横目に俺は煙草に火をつけた。

ふらりとこの店に来てはグラスを空け、流れるＢＧＭに気持ちを委ねる。
勇次は何も言わず、俺も何も言わない。
時間だけが過ぎていく。
絶対にないとはいえない日々の憂さを洗い流すには都合のいい空間

だった。

「香奈にあったぞ」

二杯目のターキーをグラスに注ぎながら勇次が切り出す。

「カナ？・・・伊藤香奈子？」

返事の変わりに差し出されたターキーを口に含む。心なしか苦い。

制服姿のあどけない笑顔が頭の片隅に浮かぶ。

「そう。来月、結婚するんだと」

「そっか」

昔のオンナが幸せになるのって、悪い気はしない。

特に香奈は特別だ・・・

「あいつ、心配してたぞ」

「心配？」

「バカの熱病はまだ続いてるのかって聞かれた」

熱病だ？　そりゃ凄い言われようだ。まぁそれも仕方ないか。

ある意味、香奈子は最初の被害者（？）だ。

「で、どうなんだ？」

「何が」

「この時期に一人でふらふらしてる所をみると。ま想像つくけどな」

「・・・・るせぇよ」

俺は小さな声でボソリと呟く。

あの頃を知っている勇次にウソを吐いても意味がない。

グラスを磨き終えた勇次も銜えてた煙草に火をつけた。外国産の独特な

香りがかすかに漂う。

「愛・・・だな」

吐き出した煙と共に勇次が言う。

「そんなんじゃねぇよ」

俺はターキーを飲み干した。舌から喉に掛けて苦味が広がる。

「っていうより、お前の場合は初恋か」
クッと笑うと勇次は自分に入れたバーボンを飲み干した。
それ以上、勇次は何も触れなかった。ただジャズが心地よく響いていた。

新しい客が店に顔を出し、２人だけの空気が変わる頃、俺は席を立った。
勇次は顔を上げて店に来た時と同じように片手を挙げると、新しい客用の
カクテル作りに集中していた。

店の外では普段と変わりない騒々しさが広がっていた。
何となく自分の中で浮遊感が漂う。少し酔ったみたいだ。

勇次の言葉がターキーと共に俺の身体を揺るがせる。
『初恋』を忘れる奴はそうはいない。
そういう意味では勇次の言葉は的を得ている。

俺はハルを忘れられない・・・・・たぶんこれからも。

## Telephon Line ～記憶1～

勇次の店を出て部屋に戻る頃、久方ぶりの雨模様になった。
俺は雨音を聞きながらベッドに潜り込む。
酔いが回っているせいか割と早く眠りが訪れて、頭の中でゆっくりと意識が渦を巻いていく感覚がする。
その渦にまどろみながら、俺はハルのことを思い出していた。

＊＊＊＊＊＊

俺より五つ年上で社会人。
「で、名前は？」
『・・・言わなきゃダメ？』
「って、じゃぁ俺はアナタのことなんて呼べばいいのさ」
電話の向こう側でかなり困惑しているのが伺える。ま、顔も知らない奴に
教えるのは躊躇するわなそりゃ。
「俺はちゃんと名乗ったでしょ。名前はイズミ。十八、現役高校生って」
当時、俺のフルネームは［伊住啓介］でイズミ。嘘はついていない。
『・・・・・』
「分かった。本当の名前じゃなくてもいいよ。呼び名とかでもさ」
『・・・・・・・・ハル』
囁くような声でハルはそう名乗った。俺は密かにガッツポーズを決める。

それは何度目かの電話のやりとり。
単純な間違い電話から始まった声だけの出会い。

夜遊びを繰り返す俺にキョウコが「連絡ぐらいしろ」とばかりに誕生日に
かこつけて持たされた携帯電話。
社会人の何％かがやっと携帯しているような時代だったから、十八のガキンチョが
持ってること自体かなり珍しかった。
もっぱらトモダチとの連絡用に使用されていた俺の携帯の待ち受け画面にある日、
覚えのない番号が表示される。俺はかなり訝しげに通話ボタンを押した。
着信相手は少し酔ったオンナの声・・・
『タカヤ？』
「誰それ」
『えっ・・・・』
「俺タカヤじゃないよ」
『ごめんなさい。間違えちゃったみたい』
プツッ。ツーツーツー
「誰？」
隣にいた勇次が画面を覗き込む。
「知らね。間違い電話」
俺はそう言うとポケットに携帯をしまい込む。と同時にまた着信。
さっきと同じ番号だ・・・・
「違うよ」
唐突に俺はそう告げる。俺の声で同じところにかかったと気付いた彼女は
ちょっとあせったように
『・・・・ごめんなさい』
「ねぇ、何番に掛けようとしてんの？」
『４７××－１１００』
「・・・・・？あってるよ」

『え、でも』
「誰だっけ？　タ、タ・・・」
『タカヤ』
「そのタカヤってのは知らない。番号は俺のだけどね」
間違いなく俺の携帯番号だった。そんなこともあるんだと思った。
『・・・・・・そう』
彼女はかなり落ち込んだ声でそう呟いた。いつから持ってるのかと聞かれ、
俺は半年前と答えた。逆に最後に掛けた時期を聞くと彼女はそのタカヤって奴に
電話しなくなってから一年は経過していると言った。
「じゃぁ、何で今更　電話してんの」
『・・・何でだろ？　声が聞きたくなったのかも』
ちょっと寂しげな声に聞こえた。

思えばその声が始まりなのかもしれない。

『ともかく・・ホントごめんなさい』
そういうと彼女は電話を切った。俺は通話の途切れた後で繰り返されるあの虚しい
電子音を聞きながら何故だか残念に思っていた。

翌日になっても、ふと気付くと携帯を見つめていた。着信履歴をひらくと一番最初
の画面に昨日最後の着信―彼女の携帯番号が表示された。
夕方過ぎを待って、俺は面白半分、期待半分でその着信にリダイヤルを試みた。
五コールの後、受信。
「ども。昨日の間違い電話先です」

なんて言いながら、話始める。彼女はびっくりしながらも電話に応じた。
しばらく取り留めのない話をして俺は彼女に聞いた。
「ねぇ、また電話していい？」
『・・・・・・何で？』
「・・・何でだろ。声が聞きたくなったのかも」
電話の向こう側で彼女の笑い声が聞こえた。高くて澄んだ笑い声。
そしてひと言
『キミって面白い』

そうやって彼女―ハルとの電話が始まった。
最初はどうでもいい日常の出来事や愚痴。固有名詞を名乗った後は多少突っ込んだ話とか。
とにかく、取りとめもない話をどちらからともなく電話しては話した。

別に逢いたいとか思わなかった。
俺の日常にいる人じゃないから。所詮、声だけのトモダチ。
現実感なんか湧くわけがない。

そう思っていた。

あの日、ハルが電話をくれるまでは・・・

## 熱き鼓動の果て～記憶２～

まもなく終電もなくなる時間だというのに、夏休みの繁華街は人の群れでにぎわっていた。
時折、ポケットから携帯を取り出しては画面を確認する動作を繰り返す俺の様子を隣に
座っている香奈子がちらちらと見ているのを感じていた。
「ねぇ、さっきから何でケータイ気にしてるのよ」
痺れを切らした香奈子が横から覗き込もうとするのを、俺は肩越しにガードする。
もうすぐ付き合って2年目に突入する彼女、伊藤香奈子はふくれっ面をして
俺の正面に立つ。はいはい、お怒りのポーズね。
「誰かの電話待ってるんでしょ。むかつく・・・」
そういうと香奈子は向こう側で盛り上がっている勇次達の元へ向かう。
追いかけてゴメンと言えば機嫌も直るんだろうけど。
かまって欲しい香奈子とかまわない俺。いつもの光景。
勇次が香奈子に気付いて目線だけを俺に向ける。俺は勇次に片手でゴメンと
手を合わせた。
仕方ないと言いたげに、いつものように唇の端で笑いながら香奈子を輪の中に入れた。
勇次だけがハルとの関係を知っていた。そして俺の中でハルとカノジョが占める割合が
変わりつつある事を。
後でまた勇次に諭されるんだろうな。いい加減選べとか言われて。
なんて事を思いながら俺はまたポケットから携帯を取り出した。

殆ど毎日だった、ハルからの着信がなくなって数日。
最初の3日位は仕事が忙しいのかと、さして気にも留めなかったけど、こうも続くと
ちょっと不安になってくる。
（そろそろ電話してみようかな・・・・）
そう思いながらも行動に移さないまま、すでに二日が過ぎようとしていた。

ここのところハルはずっと迷っていた。
就職してみれば飲み屋で知り合った恋人は、会社の上司でしかも妻子もち。
やっと決心して別れを切り出せば相手に泣き落とされるの繰り返し。
『もう嫌になる。私のすっごい好きだったオトコってこんな程度だったの？って
感じ。あーもう！』
ハルは電話口で呆れていた。呆れながらもなんだか嬉しそうで、聞いていてムッと
してくる事もある。あんま嫉妬心ないと思っていたけど、相手によるんだと痛感。
「じゃぁ、なんで別れないのさ。やっぱまだ好きなんじゃないの？」
ちょっと投げやりに言い放つ。
『う～ん・・・別れたいよ、やっぱり。だって不倫だよ？続く可能性低いし。
人のものをっていう罪悪感なんかもあるし・・・というかそうまでして付き合い
たくない。・・・・のかな多分』
ハルはちょっと考えてこうも言う。
『あとは　まぁ、きっかけかな。こうね誰かにポンて背中押して欲しい感じ」

（・・・俺は）
喉まで出かかったその台詞を飲み込む。
顔も知らない俺が何を言っても仕方がない。こうやって愚痴を聞くのがせいぜい。
俺も迷っていた。何度か自分に問いかける。
ハルと逢いたいのかどうか。
逢いたいんだろうな、多分。でもなぁ・・・
出来上がってしまった想像を壊すかもしれない不安と、出逢った後でもこうやって
続くのかどうか恐れて逢うのもどうかなぁ・・・・こんなことなら、もっと早くに
さくっと逢っときゃよかった。
我ながらなさけない。
相変わらず、うんともすんとも反応がない携帯をポケットにしまうと、勇次達の輪に
加わる。すかさず香奈子がぴったりと横につく。正直、今の俺にはちょっとウンザリ。
ま。しょうがないけど。

時間も待ちわびていた自分も忘れて遊びほうけていた頃、携帯が鳴り出す。
番号を知っている大概の連れは目の届く範囲にいる。キョウコは現在進行形のダーリン
と今頃、サイパンのどっかの島だ。
「悪い」
俺は輪を離れて、通話ボタンを押す。
「はい？」
無言。電話の向こう側に気配は感じられる。
「ハル？　聞こえてる？」
『・・・・・・・・・』

「ハル？　何？　どうした？」
気配があるのに反応しない相手にどうしたもんかと、口を開きかけた瞬間
『・・・・何でかなぁ』
泣いた後のような掠れたハルの声がする。
『何で、とっさに掛けたのがイズミなんだろ』
「はぁ？　言ってる意味。わかんねぇよ」
『だってさ、他にもいっぱい友達がいるんだよ。イズミよりもず～っと私の事知ってる
友達が・・・・なのに何で最初に思いつくのがイズミなの？』
一方的に話しかけるハル。なんだかちょっと様子がおかしい。
そのうちひと言も話さなくなる。
「ハル？」
おそるおそる呼びかける。一方的なハルの口調を聞きながら湧き上がった一抹の不安を
俺はハルに投げかける。
「彼氏と何かあった？」
ハルは何も言わない。でも微かに空気が揺れている感じが伝わってくる。
もしかして・・・・泣いてる？
『・・・私、どうしたらいい？　どうすれば終わりにできるの？
ねぇ、教えてよ・・
助けてよ』
後半部分は嗚咽に近い状態だった。
初めて知るハルの状態に俺は戸惑っていた。頭の中では色んな思いが渦を巻いて
整理できない。
俺はどうすればいいんだ？
そんな俺にハルがとどめの一撃を喰らわせる。
『逢いたい・・・』

いつになく、か細い声でそう呟いたハル。その瞬間俺の鼓動が耳元で鳴り響く。
「ハル？　今どこ」
『・・・』
「どこにいる・・」
言い終わるかどうかの時、電話口の向こうに聞こえてきたアナウンス。
終電を知らせる聞きなれた駅員の放送。
この時間、俺らのいる東口はしまっている。だったら西口！
「１０分、あぁっと、いや５分だけ待って」
『・・イズミ？』
「俺が行く、今すぐハルに逢いに行く」
それだけ言うと俺は電話を切った。
電話の向こう側で微かに「待ってる」と聞こえた気がした。

電話を切ったのを見計らって、勇次が近付いてくる。
「みんなカラオケ行こうって言うけど・・・啓介？」
俺の様子を見て、勇次が珍しく名前で呼びかける。
「例のヒトか？」
「行くって言っちまった」
勇次は煙草を口に銜える。
「そっか。まぁ香奈子には後で殴られるんだな」
そういうと勇次はそのまま輪の中に戻る。香奈子に2，3言話すのを見計らって
俺は走り出した。
あの時、勇次が香奈子に何て言ったのかは知らない。ただ数日たって呼び出された
俺は香奈子に平手を3発と「サイテー」という叫び声を頂戴した。

ハル、もうすぐで貴方に逢える。西口まで２００メートル！

## ＨＮＡＢＩ　～記憶３～

ハルが通勤の乗換えで利用する駅と、俺が住み慣れた街の最寄り駅が同じことが判明して、じゃぁ知らずにすれ違っているかもよ・・・なんていつか話していた。
ハルはそれを覚えていたんだろうか・・・・そんな事もうどうでもいいや。

とにかく輪を抜けて走り続け、西口が見えかけたところで終電利用の乗客の波に飲まれそうになった。その波を必死にかき分ける。
「いた・・・」
帰路に着く酔っ払いのサラリーマンや疲れた表情のキャリアウーマン。
はしゃぎっぱなしのガキ。その全てとは違い、波に漂う感じでシャッターに
もたれ掛かっている女性がひとり。
見たこともないのに、それがハルだと確信していた。

ゆっくりと彼女に近付く。彼女はずっと空を見上げている。
夕方に突然降った雨のせいで濡れた路面に、月明かりが反射している。
足早に通り過ぎた乗客はもういない。
取り残されたふたり。また心臓の音が耳元でする・・・・

やっと彼女にたどり着いた。
「ハル・・・」
彼女はゆっくりと俺の方を向く。
想像よりも少し小柄で、でも華奢な感じはせずかといって豊満でもない。

ノースリーブから伸びた腕にはいい感じの筋肉。
俺を見上げるその眼は少し潤んでいる。やっぱり泣いてた・・・
ハルは何も言わずに俯き、そのまま俺の腰に手を回す。
・・・オンナに抱きしめられるのって、変な感じ。
俺の心臓のすぐ下にハルの髪の毛髪の毛が触れる。まるで心音を聞かれているようでリズムが狂いそうだ。
ハルの背中にそっと手を回す。かすかに漂う柑橘系の香り。
今まで感じたことのないくらいの、柔らかい感触。

「・・・逢わないほうがいいと、思ってたんだけどな」
しばらくして聞きなれた声でそう呟く。
「あ～俺もそう思ってた」
「想像以上にオトコなんだね。イズミ」
「何だよソレ。心外だなぁ」
胸元でハルがクスクス笑う。
「ありがとう。ちょっと落ち着いた」
そう言うとハルはゆっくりと俺から離れる。
「何かあった？」
「ん？まぁね。ないとは言わない。でも大丈夫、ごめんね心配かけて」

嘘つきなハル。
話してる相手に背を向けて、うっすら震えている声でそう言っても誰も信用しないよ。両肩震えてるじゃん。
俺は背中越しにハルを抱きしめた。今度は強くしっかりと。
「イズミ・・・離して」
「やだ」
力なく拒否するハルに俺はきっぱりと言い放つ。
もう悩まない。というかここに来る時点でもう分かっていたことだ。
ハルが好きだ。

どうにもならないくらいにハルが好きだ。
俺はハルの手を取り歩き始めた。

誰かと手を繋ぎ、家路に着く。そんな時間がこんなにもドキドキしたのは初めてだ。
ハルは何も言わず、俺も何も言わない。
ただ手の平から伝わるハルの温かさがとてもいとおしかった。
家に着く頃ハルは少しだけ躊躇した。でも俺はその手を離さなかった。

リビングに通しソファに座らせる。冷蔵庫からビールを取り出しかけて
手を止める。カウンターに並べられた洋酒の瓶を見つめる。
俺はビールを戻し、炭酸水を取り出した。
１５歳。紙切れ一枚を置いてオヤジがキョウコと夫婦であることを解消
した日の夜。キョウコはこうやって洋酒と炭酸水をひとつのグラスに入れて飲んでいた。
「こうやって炭酸水がお腹の中で弾けて、嫌なコト消してくれるのよ」
とか言いながら俺のグラスにもソーダを注いだ。アルコールを割るため
だけの甘さも何もないその炭酸水は唇に辛くて自分が一気に大人になる
気がした。暗示なのかどうか分からないけど、翌日キョウコはすっきりと
した表情で出社していった。
ハルと俺の前に二つのグラスを並べる。
暗い紅色の中で小さな気泡が揺れている。
カシス・スーダ。あの日のキョウコと同じ。

「これ飲むと腹ん中で炭酸が弾けて、嫌なこと消してくれるんだって」
「？」
「俺の母親の迷信」
ハルは微笑むと、グラスに口をつける。
一口二口試すかのようにゆっくりと飲み込む。そうやって飲み干すとふぅっと大きく息を吐き出した。
「おかわりは？」
グラスに手を伸ばすと、ハルはグラスの口を手で塞ぎ首を横に振った。
その手にそっと触れる。ハルは俺が触れた手をぼんやりとみつめている。
やがて酔いに任すように話し出した。
「・・・泥棒ネコだって。仕方ないよね、知ってて付き合ってたんだから。
でもちょっと悔しい。奥さんと子供いるの内緒にして口説いたの向こう
なのになぁ。別れるって何度も言ってるのに聞いてくれないのも彼の方なのに・・・」
小さくなっていくハルを抱き寄せる。
大粒の涙が頬を伝っている彼女のこめかみの辺りに唇で触れる。
こめかみから頬へ、涙の後を伝うように口づけしていく。
そうやって唇に触れそうになった時、ハルが俯く。
「そんなに優しいキスされたら、誤解しちゃうじゃない」
震える声で自嘲気味にそう言ったハルの頬に唇で触れる。
「俺、ハルが好きだよ」
「うん。私も好きよ」
「そういう簡単な好きじゃなくて。こうやっていっぱい色んなところに
キスして、触れ合って、ベッドの中で朝迎えたりしたいって思うよ

うな、
そういう好きって事だよ」
ハルはちょっと戸惑って俺の顔を見つめる。俺はハルをちゃんと正面から
見つめた後、もう一度額に口づけする。
額から鼻筋へ頬へ順番に唇で触れていき最後に唇に触れる。
今度は拒まれなかった。
俺はハルを抱き上げて寝室へ向かった。
ベッドの上でもう一度唇に触れた。ハルの唇は柔らかくて温かい。
そのまま、ハルの温かさに芯まで触れた。

＊＊＊＊＊

まどろみかけた頭の片隅で、微かにドォーンと響くような音がして
眼が覚める。
時計を見ると午前3時を少し回っていた。
さっきの音が気になって、眠い目をこすりながらベッドを抜け出し
窓に向かう。
ブラインドを閉め忘れた窓に顔が映る。寝ぼけた表情の料頬に光の筋
が付いている。指で頬に触れる。涙の感触・・・・

ハルの夢を見るといつもそうだ。
あの日の翌朝、目が覚めると彼女はもういなかった。
キッチンのカウンターにはグラスが二つ。飲み残してあった俺のカシス・
ソーダは綺麗になくなっていて、替わりに淡いピンクの携帯が入っ
ていた。
そして、ハルは存在ごと俺の現実から消えた。
それから今まで俺の携帯に分からない着信が3回。最初は三ヵ月後、

次がほぼ1年後、どっちも公衆電話。最後が三年前の非通知。
どれも俺の声で流れる伝言を残す旨を告げるメッセージの後で切れている。
（要する留守電にあのカチャって切れる音が残されてた）
ハルじゃないのかもしれない。ハルであって欲しい・・・・
そんな気持ちが交差して、忘れられないでいる。

また、遠くの方でドォーンと音がする。まるで打ち上げ花火の弾けたような感じ。
花火・・・・
暗闇を鮮やかに染め上げて街を照らし、人を魅了して消えていく。
そんな一瞬の打ち上げ花火のようにハルは俺の生活を照らし消えていった。

でも
花火はまだ俺の中で燻っている。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5098e/

4711

2010年10月9日01時49分発行